

# 「書く」「伝える」力課題

## 全国学力テスト 県教委分析

### “文低理高”傾向続く

全国学力テストで福井県は、算数・数学や理科に比べ国語の順位が低い。文低理高の傾向が続いている。算数・数学や理科でも説明や分析を書く問題は正答率が低く、県教委は「書く力や伝える力に課題がある。考えを相手に分かりやすく伝える力は社会で生き抜くために必要で、教員が意識して指導する必要がある」と分析している。

(小林真也) 【一面に本記】

書く力について、県教委が一例に挙げたのが中3の国語Aの問題。「心を打たれた」を文末に用いた一文を、主語を明らかにした上で書くが、県内中3の正答率は25%だった。65%は主語を書かず不正解となり、国語担当の指導主事は「日本語は主語を省いても会話が成り立つからか、主語の押さえが甘い」と指摘。「英語は主語を省かない。グローバル化を意識して、普段から主語をしっかり押さえよ」という意図だ」と考察した。

書く力や伝える力の向上に向け、児童生徒の話し合いなどの際に「ただ感想を言わせたり書かせたりするだけでなく、字数を制限したりキーワード

ードを設けたりして、条件に合わせてまとめる力を付けるための工夫が必要」とした。学力テストと同時にを行った学習状況調査では、家で宿題や予習・復習をする習慣が身についている児童生徒が多かった一方、平日に1時間以上読書する児童生徒は全国平均に比べ少なかった。

県教育総合研究所の鈴木利英・教科研修センター長は

「一問一答で知識をみる問題やパターンに当てはめて答える問題は良い結果で基本が身に付いているが、見方や考え方をみる問題に課題が残った」と総括した。

県義務教育課の浦井寿尚課長は「福井県は宿題で基礎力を付けることを大事にしてきたが、それだけでは考える力は深まらない。授業で考えを深める場面をたくさん設けることが必要」とし、書く力や伝える力につながる読書について「平日は宿題や部活動でまとまった時間を取ることは難しい。学校で朝読書の時間を確保し続けるなど読書の習慣付けが大事だ」と話している。

学習状況に関する調査(抜粋)

